一女性アナキストの魅力ある歩み
　北沢洋子 週刊ポスト 1978/10/20

近代の＜負＞を背負う女

八木秋子著作集Ｉ
ＪＣＡ出版・刊　(一三〇〇円)

＜著者紹介＞１８９５年生まれ。東京日々新聞記者を経て『女人芸術』などの編集に参加した。

　この本の著者八木秋子は、きわめて興味深い生き方をしてきた女性である。戦前は大新聞の記者を勤めた後、昭和のはじめには長谷川時雨、林芙美子など当時の代表的な女性作家、芸術家の主催する『女人芸術』の編集に参加した。この頃から著者は、思想的にアナキズムに近づき、当時マルクス主義者が絶対視していたスターリン時代のソ連社会主義をはげしく批判した。『女人芸術』誌上に載せた藤森成吉にたいする著者の公開質問状が契機となって、高群逸枝なども加わった有名な「アナボル論争」が起こっている。

　昭和五年著者は、平塚らいてう、高群逸枝、住井すえたちとアナキスト系の月刊雑誌『婦人戦線』を創刊する。同じ頃、米国で起った、無実の罪で共産主義者でイタリア系移民の労働者を死刑にした「サッコ・パンゼッティ事件」をテーマにした劇「ボストン」で主役の老女の役を演じたりしている。
　左翼にたいする弾圧がはげしくなった昭和十一年治安維持法で逮捕され、二年六ヶ月の刑を受けた。釈放後は当時の多くの転向者がそうであったように、著者も満州に渡った。

　敗戦後、かつての仲間が戦後民主主義の潮流に乗ってはなやかな婦人運動の指導者となって行ったのに、著者は工場の寮母や施設の職員といった底辺の人びとの中での生活を選んだ。今日八三歳の高齢でありながら、個人通信『あるはなく』を書きつづけている。恐らく著者がこの本の中にも収録されている小説「柿をもってきた父」、「チャルメラの記録」などに登場する底辺の人びとへの愛と連帯を、戦後の繁栄の犠牲となっている人びとに変らず寄せているからであろう。革命後のソ連を題材にした小説「一九二一年の婦人労働祭」でも、プロレタリア独裁に反対し、自由を求めたクロンシュタットの反乱に連帯した労働者の群像に光を当てている。

　そのほか、この本書には、昭和の初期に著者が、『女人芸術』『婦人戦線』に発表した小説、評論が収録されている。その中には林芙美子と二人で『女人芸術』のために九州を講

演旅行したときの旅先きからの二人の手紙、あるいは「資本主義経済と労働婦人」のように紡績業における女工哀史の背景を分析した論文もふくまれでいる。

最後の部分に、最近著者がかつての仲間であった吉屋信子、高群逸枝などについて憶出という形で書いた文章がいくつか収められている。この中で著者と同様転向者として渡満し、戦敗後ソ連軍に犯されて自殺した永島暢子の憶い出は心を打つ。

本書は表題にあるようにアナキストとして戦前、戦後を生きた八木秋子の著作集第一巻である。この魅力のある女性の生き方を知るには、続巻とそして通信『あるはなく』を読まねばならない。社会の底辺に生きる人びとを書き、人間の自由と解放を求めてやまない一人の女性の一生をそこに見いだすだろう。

(北沢洋子＝国際問題評論家)